

『古市』の地名考

平安時代中期に既に『古市』の地名が見られる。

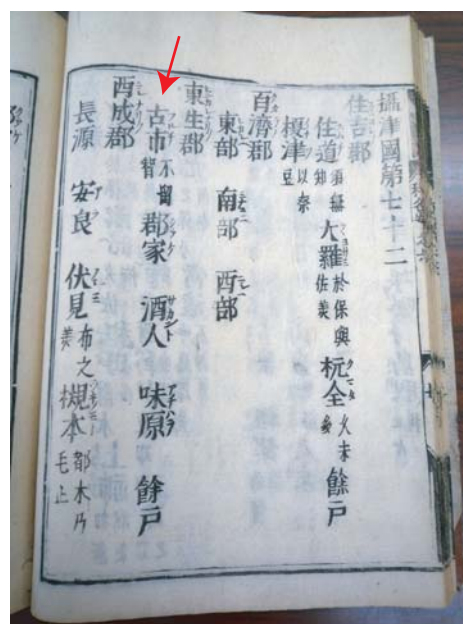
次に『古市』という地名は古市村発足時に古代の地名を復活させたものであることは前述の通りであるが、それでは古代にこの地が『古市』と称されたことを検証してみよう。我が国最古の百科事典として知られる「和名類聚抄(わみょうるいじゅうしょう)」[写真③]に『古市郷』なる地名が見られる。この書物の正確な成立年は分からないが、平安時代中期、延長8(930)年から承平5(935)年までに作られたものと推定され、醍醐天皇の娘、勤子内親王の命により側近の源順(みなもとのしたごう: 歌人・学者)が編纂したものである(こんにち写本が数種残っている)。

同書の「国郡部」の項に摂津国東生郡(ヒムガシナリと読む)には「古市(ふるち)」「郡家(ぐうけ)」「酒人(さかひと)」「味原(あじふ)」の4郷の地名が記されている[写真④]。

この『古市郷』が現在のどの地域にあたるかは正確には比定しがたい。しかし平安時代の荘園の発達とともに『古市郷』が消えてゆき、代わって「榎並荘」の地名が登場してくる。そこで『古市郷』は、ほぼ後世の「榎並荘」と考えられる。とすれば現在の城東区(北半分)、旭区、都島区にわたる広い地域が含まれることになる。『古市村』は古代の『古市郷』という広域の一部に過ぎなかったのであった。とっくに消え去った古代地名を近代に甦らせた『古市村』、その村名を受け継ぐ古市小学校、誠に深い由緒が秘められていると思うのである。



■ [写真③] 「和名類聚抄」
(資料: 大阪市立中央図書館)



■ [写真④] 「和名類聚抄」中の古市郷
(資料: 大阪市立中央図書館)

『古市』の語源は川の「淵(フチ)」という仮説

最後に『古市』の地名の語源を考えてみよう。前述の「和名類聚抄」では『古市』を万葉仮名で「布留智(フルチ)」と読んでいる。この『フルチ』が何を意味するか、一つの仮説として「淵(フチ)」が転訛して「フーチ」、さらに転訛して「フルチ」となったとも考えられる。古代にはこの地に幾条もの川が流れていたことを思えば「淵」が連想されたのであろう。和銅6(713)年、律令によって諸国の地名は2字の佳名に統一されることになった。

そこで「布留智」は2字の「古市(フルチ)」に改められたのではなかろうか。この「古市」がやがて「フルイチ」と呼ぶようになったと考えられる。

語源に渡来人『古市氏』が関連という仮説もあり

ついでにもう一つの仮説を紹介しておく。『古市』と称する郷名としてかつて当地の摂津国『古市郷』の他に、河内国古市郷、近江国古市郷、因幡国古市郷、伯耆国古市郷の4郷が存在した。

西日本各地に同じ名の郷名が点在するのは何故なのか。それは「古市村主(フルイチノスグリ)」という人物がそれらの地域の中心的氏族であったことから地名になったというのである。文献によれば彼は渡来人で、隋に渡って薬学を学び、摂津国『古市郷』に住んで、『古市氏』は代々、独自の伝統的処方薬を作っていたという。この人物と地名との関連は検証が不十分であるので鵜呑みにはできないが興味あるものと言えよう。

～「古市」に関するコラム (小井戸茂)

■苗字が「古市」の人は全国で約17,700人 (推定)

■全国の古市小学校

1. 羽曳野市立古市小学校
2. 篠山市立古市小学校
3. 広島市立古市小学校

■古市と同じ全国の地名

1. 三重県伊勢市古市町
2. 大阪府羽曳野市古市
3. 兵庫県多紀郡丹南町古市
4. 広島市安佐南区古市町
5. 山口県大津郡日置町古市

全国にたくさんあった中のいくつかを挙げてみました。